

新刊図書の紹介

『日本の水郷・水都』

日本は豊かな水に恵まれ、水辺空間の多様性に優れているため、人々は古くから水と密接な関わりをもって生活を営んできました。

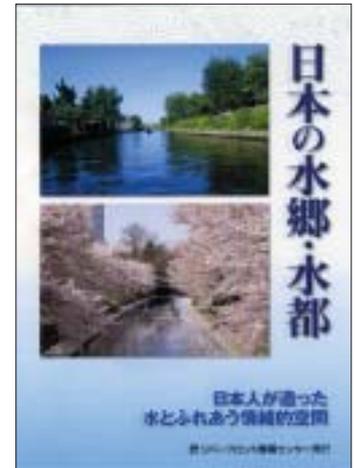
「水郷」とは、我が国の中でも特に水と人との関係が顕著である地域のこと、水との関わりの中で固有の文化が醸成された歴史的都市といえます。一方、舟による水運（舟運）が輸送手段の主である時代から、舟運や水の流れを活かした物資製造の拠点として歴史や名残をとどめる都市を「水都」と呼び、都市の規模や機能の違いから「水郷」と区別してきました。

本書では、日本各地に今なお残る水郷や水都の風景と、それを維持するための地域の取り組み事例を写真や資料を交えて紹介しています。本書をご覧ください、掲載されている水郷・水都はもとより、身のまわりの水辺にも思いを巡らせてみてはいかがでしょうか。

◎本書で紹介している水郷・水都

水郷：潮来（茨城県）、柳川（福岡県）、板倉 谷田川（群馬県）、大垣 水門川（岐阜県）、松江 堀川（島根県）、佐原（千葉県）、近江八幡（滋賀県）、松川（富山県）、巴波川（栃木県）、倉敷（岡山県） 伏見 濠川・宇治川流派（京都府）、川越 新河岸川（埼玉県）、日田（大分県）
水都：道頓堀（大阪府）、隅田川等（東京都）、信濃川（新潟県）、太田川等（広島県）

※掲載順



(財) リバーフロント整備センター 発行
A5版・129頁

『清溪川復元 ソウル市民葛藤の物語 ～いかにしてこの大事業が成功したのか～』

当センターではこの度、単行本『清溪川復元 ソウル市民葛藤の物語～いかにしてこの大事業が成功したのか～』（発行：日刊建設工業新聞社）を監修いたしました。本書は、韓国で刊行された本（原題は『プロジェクト清溪川 葛藤管理戦略』（NA NAM Publishing House刊））を翻訳したものです。

今から30～40年前、韓国ソウルでは市内を流れる清溪川（チョングェチョン）を暗渠化し、さらにその上に高速道路を建設しました。「清溪川復元事業」は、それらを除去し、昔の清溪川を復活させるという画期的な事業で、2003年7月の工事着工からわずか2年あまりという驚異的なスピードで完成しています。この事業は、都市部における河川の再生事業として世界的に注目されており、日本でも東京の日本橋や渋谷川等の景観問題と関連して話題になっています。

本書のキーワードである「葛藤」とは、公共事業を中心とする公的施策の実施を巡って生じる社会的対立のことを指します。様々な主体間で生じる様々な「葛藤」を、どのように管理・解決し、この大事業を成功に導いたのか。本書ではその過程を生々しく描写し、ソウル市民が悩み、苦しみ、話し合い、苦渋の選択をしながら、この大事業を成し遂げていったことを知らしめてくれます。河川、都市計画等に携わる行政関係者のみならず、まちづくりに関心のあるNPO や一般市民の方々にとっても参考になることと思います。

黄 祺淵・邊 美里・羅 泰俊 共著、周藤利一 訳、金光鎰 特別監修、(財) リバーフロント整備センター 監修/日刊建設工業新聞社 刊/2100円/A5版・378頁

